

## デザイン至上主義がもたらした産地の盛衰

### -1950年代～1990年代の横浜スカーフ産業研究-

氏名 門田 園子

本論文では、1950年代から1960年代にかけて、日本有数の地場産業に成長し、1990年代に衰退期を迎えた横浜製スカーフ、すなわち横浜スカーフについて、デザインに対する現場の意識がスカーフ産業の盛衰に与えた影響を論証し、スカーフのデザインから、第二次世界大戦後の国民国家制度を基盤に、各国間でグローバルに展開した文化を、その政治的・経済的背景とともに考察した。先行研究では横浜スカーフ産業は経済・産業史の文脈で語られてきたが、本論ではスカーフのデザインに着目し、製造現場がデザインを第一義としたことがスカーフ産業の盛衰をもたらしたと考察した。

開港以来、横浜には東北・甲信越・北関東から主要輸出品であった生糸が集められ、海外に出荷されていた。生糸を素材にした西洋伝来の服飾品であるスカーフが横浜で製造されるようになったのは1930年代初頭で、絹の手巾より大幅の捺染が可能となったことがきっかけとされる。以降戦時期の中断を経て、1950年代から1990年代まで、世界各地に輸出されていた。低賃金の労働力と価格競争により、安価に抑えられた土産用のスカーフに始まり、すぐれた捺染技術と高品質の本絹を使った奢侈品としてのスカーフに至るまで、ピーク時の1965年には、年間230万ダースに上る大量のスカーフが横浜から輸出されていた。

横浜スカーフ産業の歩みは、戦後日本の復興の歴史と重なる。復興期、繊維産業は再び重要な輸出品目とみなされた。その過程で再燃したのが、戦前からすでに起こっていた日本の業者による海外意匠模倣問題である。第1章では、1950年代、横浜スカーフの保全登録は海外意匠の模倣防止を目的に始まったが、新たなデザイン創作を促そうとする現場の意識が反映していたことも指摘した。背景には、1950年代に「デザイン」を国家再生のイデオロギーとみなす風潮が、横浜スカーフ産業にも作用していたと考察した。

第2章では横浜発オリジナル・デザイン創出のために行われたコンクール、見本市、デザイナー育成などの取り組みを取り上げ、海外意匠の模倣ではない、独創的なデザイン創造への働きかけがあったことを論じた。

横浜では、受注分業生産体制は克服すべき課題と捉えられていた。とはいえ、こうした体制下で製造されたスカーフのデザインは、同時代の文化的、政治的、経済的背景を映し出しているという点で、歴史資料として価値の高いものである。第3章では、保全・認定登録されたスカーフ、特許庁登録意匠から、横浜スカーフのデザインとその傾向、対象とされた市場を分析した。その結果、花柄や幾何学柄のほか、土産用、記念用、宣伝用など多様なスカーフが、世界市場に流通していたことが確認できた。

第4章では、輸出スカーフに見られる日本らしさを加味した創作的デザインについて論じた。1950年代デザイン界で伝統回帰あるいは伝統創出の議論が起こっていたことを踏まえ、スカーフに表された「ジャパニーズ・モダン」デザインから、モダニズムと相性の良い

「伝統」が抽出された過程を論じた。

第5章では、アフリカに輸出された横浜スカーフについて、英国の貿易商社「ユナイテッド・アフリカ・カンパニー」(UAC)が関わっていたことを指摘し、横浜は、英国と英連邦のはざまに立つ役割を果たしていたことを明らかにした。アフリカの「伝統」が、宗主国によって見出されたこと、アフリカの独立運動時には宗主国と植民地の共存が視覚化され、独立後は教育や政治、消費活動など西洋の近代国家システムがアフリカの新国家創造に流用されたことを、アフリカ向け横浜スカーフのデザインから分析した。

第1章から第5章までは、豊かさと効率を追求し続ける過程で育まれたデザイン至上主義が横浜スカーフ産業の盛況をもたらしていたことを実証した内容である。しかしながら、デザイン至上主義が同時に横浜スカーフ産業の衰退をももたらしたことを、第6章で、横浜スカーフの内需が輸出を超えた1970年代以降、スカーフのブランド・ライセンス製品製造へと舵を切ったことが、横浜発オリジナル・デザイン育成を阻み、結果的に横浜スカーフ産業の衰退を招いたと論じた。ブランド・デザインになびいていった1980年代は、言い換えれば、ブランドのデザイン力が何よりも優る時代に転換したということであり、デザインに付加価値を見出そうとした戦後の横浜スカーフ産業の姿勢は、換骨奪胎された。産業の衰退をもたらしたブランド・ライセンス製品の興隆は、製造業者のデザインへの意識が高かったからこそ起こり得た現象であった。

本論の意義は横浜スカーフ産業について、残されたスカーフ見本から、同時代の文化・歴史的背景を読み解き、横浜スカーフ産業が戦後日本経済の好不況とともにあったのは、デザインを第一義としたことが要因であったことを明らかにしたことにある。